丹生大師周辺を建築ウォッチング

松阪の南の多気郡多気町丹生は、集落の外側に田園が広がる何処か懐かしい農村風景の盆地に位置しています。近くを中央構造線が走り、地名の丹生（にう）の丹は水銀を示す地名で、縄文時代から昭和初期まで続いた水銀鉱採掘跡も残されています。奈良の大仏建立時には、かなりの丹生水銀が使われたとの事。

村の中心に位置する、丹生大師（にうだいし）の正式名称は「女人高野丹生山神宮寺成就院」。縁起によると、空海の剃髪の師匠、勤操（ごんそう）大徳によって開山、弘仁4年（813）、伊勢神宮参拝途中の空海によって、七堂伽藍が整備された。中世には、丹生千軒と呼ばれ、全国から、商人や鉱夫が集い、和歌山別街道の宿場町として、繁栄の時代を築いた。現在残る伽藍の多くは、江戸時代前から中期に建造されたとあります。第二次世界大戦中の鉄不足で、鐘楼の寄付を迫られる寺院が多い中、ごく僅か、位の高い寺院は残すことを許された内の一つ、歴史のある音色を奏でる鐘楼は、何時でも自由に鳴らす事が可能で、煩悩が少し消えたような体験ができます。

丹生の歴史を語るうえで、欠かせないスーパーヒーローが、西村彦左衛門為秋氏（以後敬称略）です。江戸時代に入ると、水銀の採掘が衰退し、出稼ぎに出る村人も多くなります。文化5（1808）から文政6（1823）にかけ、西村彦左衛門は、私財を投じて、櫛田川から全長30キロに及ぶ、水田開発のための「立梅用水」（たちばいようすい）を、見事なリーダーシップのもとに完成（延247,000人）させました。和歌山別街道沿いの、造酒屋の生家跡は今も残り、その偉業を讃えて、西村彦左衛門記念公園として整備され、銅像（2005）も建てられています。現在も436 haの受益面積を誇る現役の農業用水は、「世界灌漑施設遺産」に登録されています。全長わずか6mの高低差で流れ、機械的な土木技術が全く無かった時代に、素掘りのトンネルや、切り立った岩山を通る切通しは圧巻の景観です。6月のあじさいまつりには、素掘りトンネル区間で、ボート下りの体験ができるとの事です。西村彦左衛門の7代子孫にあたる西村彦蔵氏は、2017年の豪雨で全壊した、丹生大師の大師堂（御影堂）に至る回廊、老朽化した仁王門の再建の為に、私財を投じ2019年10月に見事に再建落成されました。新しく記念公園内にはその功績を讃えて、西村彦蔵氏の銅像も建てられています。

和歌山別街道沿いには、三井家の三井高利の母親の殊法（しゅほう）の生家の商家永井家跡地も、小さな集会所の敷地内に石碑が建てられ脚光を浴びつつあります。また、人口減少等、空き家となって放置された古民家は、惜しくも解体されてしまうのがこの地域の現状です。旧丹生小学校の隣の本楽寺の大イチョウと、手入れが行き届かなくなりつつある茶室付きの回遊式日本庭園（快楽園:けらくえん）。他にも伝えたい歴史的建造物候補満載で、ポテンシャルの高さを感じました。

束の間のコロナ禍の制限を縫うように、目的地を絞り込み11月20日(土)、三重地域会10名の参加で開催することができました。当日は、天候にも恵まれ、集合場所の、ふれあいの館にて、一同昼食をとることもできました。候補地選定の際、2013年発刊「三重の建築散歩」にも掲載は無く、アーキテクト三重2012のジャケ写（表紙の写真）のポイント（丹生山神宮寺回廊）の所在地として、突き動かすものを感じました。開催にあたり、三重地域会の皆様には、ご理解ご協力を頂き、また、事前の打合せから、当日の案内役として多気町観光ボランティアガイド「語り部の会」会長の松本様と顧問の中西様には大変お世話になりました。この場をお借りし、お礼申し上げます。奇しくも2年連続で、古刹めぐり（特に趣味では無いが）のような建築ウォッチングとなりました。心の中の奥底に、歴史的パンデミック収束を願って祈りたい気持ちが芽生えているのかもしれません。次年度は是非、県外へ出てモダニズムツアーを開催できるよう祈りたいと思います。

伊藤 達也（JIA三重）
設計工房NEXT

▲丹生大師仁王門

▲縦梅用水切通し

▲参加メンバー集合写真

▼本楽寺